

兵庫県高砂市でイシガケチョウを観察

島崎正美

イシガケチョウ（以下、本種）の兵庫県における記録と分布については「兵庫県の蝶」（広畑・近藤, 2007）に記載があるように、継続的に成虫で越冬できるかどうかのカギを握っており、いぜんとして確実に定着しているかどうかは明らかではない。筆者は2016年に加古川市における本種の観察事例をまとめて報告をしていて（竹内・島崎, 2016）、その後、2021年4月1日にも加古川市志方町で越冬後の個体を確認しているが（図1）、毎年継続して観察できているわけではなくいぜんとして加古川市に定着している確証はない。そのような状況下、これまでに公式報告のない高砂市で2021年に越冬個体、および越冬に向かう時期の個体を観察したので報告する。

観察地は高砂市曾根町のオオバイヌビワが多く自生する日笠山（標高62m）の山麓部と山頂部である。越冬個体の観察は4月20日、山麓部での飛翔個体の目撃で、山側から自動車道路際まで特有の滑翔をみせながら飛んできて、そのまま姿を消しており撮影記録は出来ていない。越冬前の個体の観察は11月11日で、山頂部でウラギンシジミが飛び交う様子を観察していた際、どこからか突然現れた個体が滑翔を繰り返した後遠く離れたアカメガシワの葉上にとまったのを確認した。急ぎ走り寄ってビデオカメラのフォーカス合わせをしている間に飛び立たれたが、そのままビデオカメラで飛翔を追跡した記録から、飛翔個体がかろうじて本種であると視認できる（図2）。加古川市では自然状態での産卵、幼虫、蛹などの観察ができていたが、高砂市では成虫を観察できただけで、今後も観察を継続して高砂市における本種の生態を明らかにしたい。

【観察データ】

観察日：2021年4月20日15時頃

観察地：高砂市曾根町日笠山山麓部

観察日：2021年11月11日11時55分

観察地：高砂市曾根町日笠山山頂部

○引用文献

- 広畑政巳・近藤伸一, 2007. 兵庫県の蝶, 331pp., 岩峰社, 東京
竹内 隆・島崎正美, 2016. きべりはむし, 39(1): 19-21

(Masami SHIMAZAKI 兵庫県高砂市)



図1 2021年4月1日, 加古川市志方町: 越冬明けの個体。



図2 2021年11月11日, 高砂市曾根町: 飛び去って行くイシガケチョウ (左下)。

ウラナミジャノメがイヌツゲとノイバラの花で吸蜜

島崎正美・島崎能子

筆者らは加古川市とその近郊に生息する希少チョウ類の保全を目的とするボランティア団体「加古川の里山・ギフチョウ・ネット」の一員として、1999年に始めたギフチョウ（絶滅危惧Ⅱ類）に次いで、2008年からヒメヒカゲ（絶滅危惧ⅠB類）の保全活動も開始し、その調査過程でウラナミジャノメ（*Ypthima multistriata nipponica* 絶滅危惧Ⅱ類；以下本種）の観察記録もとってきている。

蝶の多くは成虫となって以降は、花の蜜や樹液、あるいは湿地帯や動物の排泄物などでの吸汁を活動のエネルギー源としているが、本種やヒメヒカゲについてはそのような場面に出会うことが極めて少なく、野外での生態観察の重点項目にしてきた。

ヒメヒカゲについてはノイバラ（*Rosa multiflora*）の花での吸蜜、湿り気のある路面での吸汁、および路面に落ちた野鳥の糞周りで吸汁する場面などを観察できて報告（島崎, 2013）した。その後2021年5月には、朝露が残ってはいない時間帯にケネザサの葉上で口吻を伸ばして何かを吸汁するオスを観察している（島崎, 2021）。

本種に関しては幼虫がショウジョウソウ（島崎,

2011) とケネザサ(島崎, 2015) を食草としていること, 野外での自然産卵の発見(島崎, 2018), 日本初の自然状態での蛹の発見と羽化までの観察記録(島崎, 2019) など, いくつかの新知見を得てきているにもかかわらず, 容易に想定できる朝露の吸汁など, 少なくとも 2008 年から 2020 年まで筆者らは本種が何かに口吻を伸ばす場面を観察できていなかった.

2021 年の 5 月, 東播磨の生息地で初めてイヌツゲ(*Ilex crenata*) の花に口吻を伸ばすオスを観察し, 6 月にはメスがノイバラの花芯に口吻を伸ばす場面も観察できた. 原色日本蝶類生態図鑑(福田ほか, 1984) に「オカトラノオ, ツルボ, ヒメジョオン, タビラコ的一种, ウツボグサ, ネズミモチへの訪花例が知られるが, ヒメウラナミジャノメに比べて訪花例の観察は少ない」との記載があるが, 確実に口吻を伸ばした記録を伴う吸蜜事例かどうかの記述はなく, 本種が花芯へと口吻を伸ばす状況まで記録した確かな吸蜜例として報告する.

[事例 1]

2021 年 5 月 26 日 10 時 26 分から約 40 秒間
吸蜜植物: イヌツゲ(図 1; オス)

[事例 2]

2021 年 6 月 3 日 14 時 17 分から約 70 秒間
吸蜜植物: ノイバラ(図 2; メス)

観察地はいずれも加古川市志方町で, 今回の生息地では例年ヒメヒカゲより 1 週間ほど遅れて本種が発生し, 成虫は 7 月の上旬までみられる(島崎, 2010). 2021 年は珍しくヒメヒカゲと同じ時期に出現するという早い発生で, 5 月 26 日の午前中, イヌツゲの葉上にとまって開翅状態で日光を浴びる個体を観察中, 花が咲く部分へと移動した時点で翅を広げたままイヌツゲの花に口吻を伸ばして吸蜜し始めた(図 1). その様子を側面からも記録しておこうと撮影位置を変えている間に飛び立たれた.

次いで, 曇り空で今にも雨が降りそうな 6 月 3 日の午後, ノイバラの花が多く咲く草むらを飛んでいた本種が少しだけ花にとまってすぐに飛び離れる動きを追うと, 再び花にとまり, 今度は明らかに花芯へと口吻を伸ばして吸蜜し始めた(図 2). 開翅しながらの吸蜜で前翅の特徴からメスだと判別できた. 2008 年から生態観察を継続している過程で, 本種がノイバラの花にとまってもすぐに飛ぶ光景には出会っているが, それも 13 年間でわずかに三度だけで, 時間をかけて確実に吸蜜する場面は今回が初めての観察例である. おそらくヒメヒカゲと同じく朝露や路面での吸汁もしていると考えられ, 今後も注意して生態観察を継続する.

○参考文献

- 福田晴夫ほか, 1984, 原色日本蝶類生態図鑑(IV): p. 73, 保育社, 大阪
島崎正美, 2010, 加古川の蝶: 年間発生状況. きべりはむし 32(2): 12-14
島崎正美, 2011, 加古川市におけるウラナミジャノメ *Ypthima multistriata* の食草と第 2 化発生について. やどりが (229): 32-39
島崎正美, 2011, ケネザサを摂食するヒメヒカゲとウラナミジャノメの幼虫を観察. 月刊むし (536): 53-54
島崎正美, 2013, ヒメヒカゲ *Coenonympha oedippus arothius* に関する観察記録-2. やどりが, (237): 33-40
島崎正美・島崎能子, 2018, ウラナミジャノメの自然卵を発見. きべりはむし, 41(1): 26
島崎正美・島崎能子, 2019, ウラナミジャノメの自然状態での前蛹から羽化までを初記録. 月刊むし, (584): 2-4
島崎正美, 島崎能子, 2021, ヒメヒカゲの吸汁とイヌツゲでの吸蜜事例. きべりはむし, 44(2): 57

(Masami SHIMAZAKI 兵庫県高砂市)
(Yoshiko SHIMAZAKI 兵庫県高砂市)



図 1 2021 年 5 月 26 日, イヌツゲの花で吸蜜中のウラナミジャノメ♂.



図 2 2021 年 6 月 3 日, ノイバラの花で吸蜜するウラナミジャノメ♀.